

311

三部本紀

014097-001-3

特56-344

三部本紀 卷之3, 4

松岡 調/編

1冊(34丁)

M17

ABB-0361



特56

344

三部本紀

松岡調編輯

卷之三

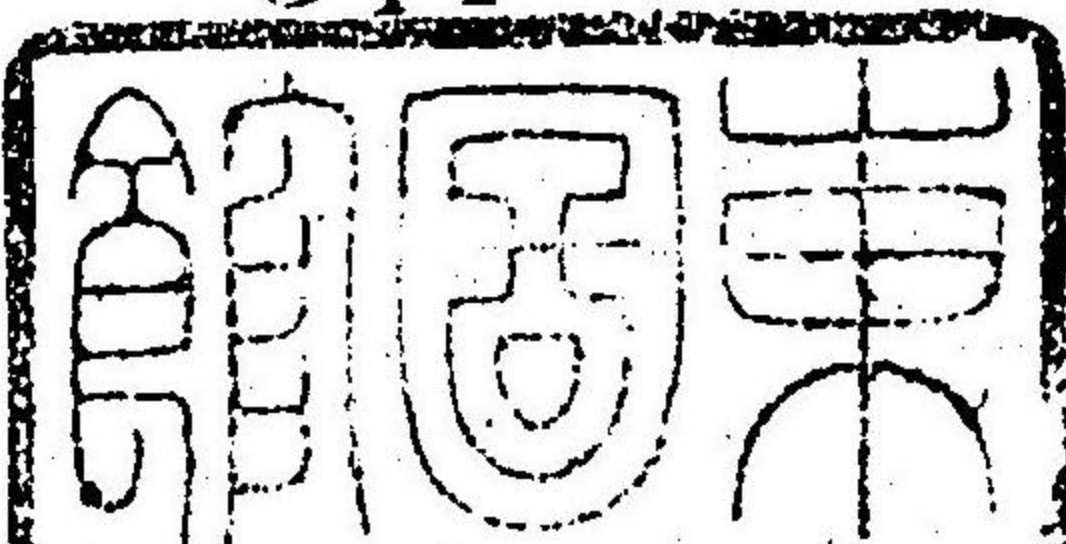
版 權 免 許

松岡調編輯

三部本紀 卷之三

旭影樓藏版

特56
344



三部本紀卷之三

日本紀

事比羅宮主典兼權少教正松岡調謹校

神代上

天地開闢之初洲壤浮漂 譬猶游魚之浮水上也 于時

其洲中生一物 狀如葦牙 便化爲神 號

國常立尊 次國狹植尊 次豐斟淳尊 凡三神

矣

天地開闢之章

一書曰 天地初判 一物在於虛中 狀貌難言 其

りてなりませるかみを○あめのとこたちのみこととまをす○つぎにうましわしかびひこぢのみこと○またも
化神 號天常立尊 次可美葦牙彦舅尊 又有
のあり○うさあぶらのとこくしてはほそらにありき○これによりてなりませるかみを○くにとこたちのみ
物 若浮膏在於空中 因此化神 號國常立
こととまをす○

つぎにかみましき○うひぢにのみこと○またうひぢねのみこととまをす○すひぢにのみこと○またすひぢねのみ
次有神泥土煮尊 亦曰 泥土根尊 沙土煮尊 亦曰 沙土
こととまをす○つぎにかみましき○ねほどのぢのみこと○またねほどまぢのみこととまをし○またねほどまひて

根尊 次有神 大戸道尊 亦曰 大苦道尊 亦曰 大戸
のみこととまをし○またねほどむぢのみこととまをす○ねほどのべのみこと○またねほどまべのみこととまをし

摩彦尊 亦曰 大富道尊 大戸邊尊 亦曰 大苦邊尊
○またねほどまひりのみこととまをし○またねほどむべのみこととまをす○つぎにかみましき○ねもだるのみこ

亦曰 大戸 摩姫尊 亦曰 大富邊尊 次有神 面足尊
○かしこねのみこと○またあやかしこねのみこととまをし○またあゆかしさのみこととまをし○またあをかし

惶根尊 亦曰 吾屋惶根尊 亦曰 吾忌樞城尊 亦曰 青
さねのみこととまをし○またあやかしさのみこととまをす○つぎにかみましき○いさなきのみこと○いさなきのみ

樞城根尊 亦曰 吾屋樞城尊 次有神 伊奘諾尊伊奘冉
尊

みこと○すべてやばしらのかみましき○くにとこたちのみことより○いさなきのみこといさなきのみこととま
尊 凡八神矣 自國常立尊 迄伊奘諾尊伊奘冉尊
○これをかみよなよとまをす○

あるよみにいはく○くにとこたちのみこと○あめかがみのみことをなし○まひ○あめかがみのみこと○あ
一書曰 國常立尊 生天鏡尊 天鏡尊 生

めよろづのみことをなしたまひ○あめよろづのみこと○あわなきのみことをなしたまひ○あわなきのみこと
天萬尊 天萬尊 生沫蕩尊 沫蕩尊

○いさなきのみこと○いさなきのみことをなしたまひ○あるひは○このふたばしらのかみは○あをかしさ
生伊奘諾尊伊奘冉尊 一云 此二神 青樞城

ねのみことのみことなりともいふ○
根尊之子也

あるよみにいはく○めをたぐひなりませるかみは○まつうひぢにのみこと○すひぢにのみこととまし○つぎに
一書曰 男女耦生之神 先有泥土煮尊沙土煮尊 次有

つねぐひのみこと○いくぐひのみこととまし○つぎにねもだるのみこと○かしこねのみこととまし○つぎにいさ
角織尊 活織尊 次有面足尊 惶根尊 次有伊

奘諾尊伊奘冉尊
さきのみこと○いさなきのみこととまし○

ここにいざなぎのみこと○いざなみのみこと○あまのうきはしらのうへにたてして○はかりてのりたまはく○そこ

於是伊弉諾尊伊弉冉尊立於天浮橋之上 共計曰 底

つしたにあにくになからめやどのりたまひて○すなはちあまのぬほをさしたるしてさぐりたまひしかば○あ

下豈無國歟 廼以天瓊矛指下而探之 是

うなばらとえたまひき○そのほこのさきよりしたたるしほ○こりてしまとなりき○なをたのころしきといふ○

獲滄溟 其矛鋒滴瀝之潮 凝成一島 名之曰礮馭盧島

ふたばしらのかみ○そのしまにあもりまして○みどのまはひしたまひて○ねほやしまたに○またやまかはくさ

二神 降居彼島因 欲共爲夫婦 產生大八洲國及山

さのかみたちをうみなさむむねもほしき○すなはちたのころしまを○くになかのみはしらとして○をがみはひだ

川草木神等 便以礮馭盧島爲國中柱而 陽神左

りよりめぐり○めがみはみぎりよりめぐり○くにのみはしらをわけめぐりて○めぐりあひたまふとき○めがみ

旋 陰神右旋 分巡國柱 同會一面時 陰神

まつことわけして○あなにやしうましをどこにあひぬのりたまへば○をがみよろこばすてのりたまはく○あ

先唱 曰意哉遇可美少男焉 陽神不悅曰 吾

もよますらとなれば○まつことわけすべきことわりなるを○なともたわやめのかへりてことささだてる○ことす

是男子 理當先唱 如何婦人反先言乎 事既

でにふさはす○あらためめぐりてむどのりたまひき○かれふたばしらのかみ○またさらにくめぐりあひたまひき○

不祥 宜以改旋 於是二神 却更相遇

このたびは○をがみまつことわけして○あなにやしうましをどこにあひぬのりたまひき○かくてめがみにどひ

是行也陽神先唱 曰意哉遇可美少女焉 因問陰神

たまはく○みましがみみはにかになれるとどひたまへば○あがみにはめのはじめといふとろわりとこたへたま

曰汝身有何成耶 對曰吾身有一雌元之處

ひき○をがみのりたまはく○あがみにもをはじめといふとろわり○あがみのをはじめのころを○みまし

陽神曰 吾身亦有一雄元之處 思欲以吾身元處合汝

身元處

於是陰陽

始構成爲夫

婦

及至產時

先以淡路洲爲胞廼生大日本豊秋

津洲

次生伊豫二名洲

次生筑紫洲

次雙生

億岐洲與佐度洲

世人或有雙生者象此也次生越洲

次生大洲

次生吉備子洲

由是 始起大

八洲國之號

卽對馬島壹岐島及處處小島

皆是潮沫凝

○四

成矣
てなれるなり○

あるふみにいはく○あまつかみ○いさなぎのみこと○いさなみのみこと○にのりたまはく○とよわしはらのち
一書曰 天神 謂伊弉諾尊伊弉冉尊 曰有豐葦

いはわきのみづはのくにあり○みましゆきてつくりかためてよどのりたまひて○すなはちあまのぬほこそた
原千五百秋瑞穂之地宜汝往脩之 廼賜天瓊戈

まひき○ここにふたばしらのかみ○あまのうきはしにたたして○ほこそをるして○くにまきたまふ○かれあ
於是二神 立於天上浮橋投戈 求地 因畫

をらなばらをかきてひきあげたまへば○すなはちほこのさきよりしたたるしほ○こりてしまとなりき○なを
滄海而引擧之 卽戈鋒垂落之潮 結而爲島 名

れのころしまといふ○ふたばしらのかみ○そのしまにありまして○あめのみはしらをみたて○またやひろ
曰礮馭盧島二神 降居彼島 化豎天柱 又化作

をのそみたてたまひき○をがみかみに○みましがみみはいかになれるとひたまふに○わがみにはなりな
八尋之殿 陽神問陰神曰汝身有何成耶 對曰吾身

りて○めのはじめといふところひとどころわもとこたへたまへば○をがみのりたまはく○わがみにもなりな
具成而有稱陰元者一處 陽神曰 吾身亦具

りて○そのはじめといふところひとどころあり○このわがみののはじめのところを○みましがみみのめ
成而有稱陽元者一處 思欲以吾身陽元 合汝身陰元

はじめのところにあはせむとたもよどのりたまひき○しかしか○すなはちあめのみはしらをめぐらむとして
云云卽將巡天柱
約束 曰妹自左巡 吾當右巡 既而分
めぐりあひたまひて○めがみさきにこそわけして○あなにやしえをどをどのりたまひ○をがみのちに○あ
巡相遇 陰神乃先唱 曰妍哉可愛少女歟 陽神後和
なにやしえをどめをどこたへたまひて○つひにみどのまはひしたまひて○まづひるをうみたまひしかば
曰妍哉可愛少女歟 遂爲夫婦 先生蛭兒
○すなはちあしふねにのせてながしたまひき○つぎにわはしまをうみたまひき○これもみこのかすにいれず
便載葦船而流之 次生淡洲 此亦不以充兒
○かれあめにかへりのばりまして○つばらにそのさまをまをしたもふとどきに○あまつかみ○ふとまににうら
數故還復上詣於天具奏其狀時 天神 以太占而
へて○すなはちをしへたまはく○をみなをこささだちつればか○さらにかへりくたるべしとをしへたまひ
卜之乃教 曰婦人之辭其已先揚乎宜更還去
て○すなはちひとさをもうらへてあまくだしたまひき○かれふたばしらのかみ○またみはしらをあらためめ
乃卜定時日而降之 故二神 改復巡柱
ぐりたまひて○をがみはひだりより○めがみはみきより○すでにめぐりあひたまふとどきに○をがみまづこ
陽神自左 陰神自右 既遇之時 陽神先

○五

どあげして○あなにやしえをどめをのりたまへば○めがみのちに○あなにやしえをどをこたへたまひ
唱 日妍哉可愛少女歎 陰神後和日妍哉可愛少男歎
さ○さてのちひとつみあらかにすみまして○うみませるみこそ ○ねはやまどとよわさつしまといふ○つきに
然後同宮共住而 生兒 號大日本豊秋津洲次淡

あはぢのしま○つきにいよのふたのしま○つきにつくしのしま○これによりて○ねはやしまぐにといふ○
路洲 次伊豫二名洲 次筑紫洲 次億岐三子洲次佐度
洲 次越洲 次吉備子洲因此謂之大八洲國矣

あるふみにいはく○いざなぎのみこと○いざなみのみこと○ふたばしらのかみ○あまつかりのなかにたたし
一書曰 伊奘諾尊 伊奘冉尊二神 立于天霧之中

て○あれくにをえまほしどのりたまひて○すなはちあまのぬほこそさしたるして○さぐりたまひて○ねのこ
日吾欲得國 乃以天瓊矛指垂而 探之 得礮

ろしまをえたまひき○すなはちほこそぬきあげてよろこばして○うれしきかまくにありけりとのりたまひき○
馭盧島 則拔矛而喜之 日善乎國之在矣

あるふみにいはく○いざなぎのみこと○いざなみのみこと○ふたばしらのかみ○たかまのはらにましまして
一書曰 伊奘諾尊 伊奘冉尊二神 坐于高天原

○くにありなむどのりたまひて○すなはちあまのぬほこそもちて○ねのころしまをかきなしたまひき○
日當有國耶 乃以天瓊矛 畫成礮馭盧島

あるふみにいはく○いざなぎのみこと○いざなみのみこと○ふたばしらのかみ○かたらひたまはく○ものあ
一書曰 伊奘諾尊 伊奘冉尊二神 相語 日有
りてうさあふらなせり○そのなかにけだしくにあらむとかたらひたまひて○すなはちあまのぬほこそもちて
物若浮膏 其中蓋有國乎 乃以天瓊矛
○ひとつしををかきなしたまひき○なをたのころしまといふ○

探成一島 名曰礮馭盧島

あるふみにいはく○めがみまつことあげして○あなにやしえをどをのりたまひき○ここにめがみのこと
一書曰 陰神先唱 日美哉善少男 時以陰神先

言故 為不祥 更復改巡 則陽神先唱
ささだちたまひしゆゑに○さかなしとれもほして○さらにあらためめぐりたまひき○すなはちをがみまつこ
どあげして○あなにやしえをどめをのりたまひて○つひにみわひまさむとすに○そのわざをしりたまは

日美哉善少女 遂將交合而 不知其術
ざりき○そのまにはくなぐりてびきて○そのをかしらうごかししを○ふたばしらのかみみそなはして○

時有鵲鴿飛來 搖其首尾 二神見而
そをさぐりたまひて○すなはちとつきのみちをえたまひき○

學之 卽得交道

あるふみにいはく○めがみまつことあげして○あなにやしえをどをのりたまひて○すなはちをがみのみ
一書曰 陰神先唱 日妍哉可愛少男乎 便握陽神之

てをもらして○つひにみとのまぐはひしたまひて○あはぢのしをうみたまひさ○つぎにひるこ○
手 遂為夫婦 生淡路洲 次蛭兒

あるふみにいはく○ふたばしらのかみ○みとのまぐはひしたまひて○まづあはぢのしをえとして○ねはや
一書曰 二神 合為夫婦 先以淡路洲為胞生大

まをよわさつしまをうみたまひさ○つぎにいよのしま○つぎにつくしのしま○つぎにねさのしま○さ
日本豊秋津洲 次伊豫洲 次筑紫洲 次雙生億岐洲

のしまをふたごにうみたまひさ○つぎにこしのしま○つぎにねはしま○つぎにこしま○
與佐度洲 次越洲 次大洲 次子洲

あるふみにいはく○まづあはぢのしをうみたまひさ○つぎにねはやまをよわさつしま○つぎにいよのふ
一書曰 先生淡路洲 次大日本豊秋津洲次伊豫二

たなのしま○つぎにねさのしま○つぎにささのしま○つぎにつくしのしま○つぎにいさのしま○つぎにつし
名洲 次億岐洲次佐度洲 次筑紫洲 次壹岐洲次對馬

洲

あるふみにいはく○ねのころしまをえとして○あはぢのしをうみたまひさ○つぎにねはやまをよわさつ
一書曰 以礮馭盧島為胞生淡路洲 次大日本豊秋津

しま○つぎにいよのふたなのしま○つぎにつくしのしま○つぎにささのしま○つぎにねさのしま○さ
洲次伊豫二名洲 次筑紫洲 次吉備子洲次雙生億岐洲

章之神諸産

のしまをふたごにうみたまひさ○つぎにこしのしま○

與佐度洲

次越洲

あるふみにいはく○あはぢのしをえとして○ねはやまをよわさつしまをうみたまひさ○つぎにあはし
一書曰 以淡路洲為胞生大日本豊秋津洲 次淡洲

○つぎにいよのふたなのしま○つぎにねさのみつごのしま○つぎにささのしま○つぎにつくしのしま○つぎ
次伊豫二名洲 次億岐三子洲次佐度洲 次筑紫洲 次

にさびのこしま○つぎにねはしま○
吉備子洲次大洲

つぎにうみのかみをうみたまひ○つぎにかはのかみをうみたまひ○つぎにやまのかみをうみたまひ○つぎにさの
次生海神 次生川神 次生山神 次生木

ねやくのちのかみをうみたまひ○つぎにくさのねやかやぬひめのかみをうみたまひさ○またのみなはぬづちの
祖句句廻馳神 次生草祖草野姫神 亦名野槌神

かみ○かくていさなきのみこと○いさなのみこと○はかりてのりたまはく○あはすでにねはやしやくに○また
既而伊奘諾尊伊奘冉尊 共議曰 吾已生大八洲國及

やまはくささのかみをうみつ○なぞもあつちのさみとますべきかみをうまさらむとのりたまひて○ここにま
山川草木神 何不生天地之王者歟 於是

づひのかみをうみたまひさ○あまてらすねはみかみとまをす○またねはひるめのみこととまをし○またあまてら
先生日神 號天照大神 亦曰大日雲尊 亦曰天

すひるめのみこととまをす○このみこみひかりうるはしくまして○あめつちのうちにてりとほらせり○かれふたば
照日靈尊 此子光華明彩 照徹於六合之内 故二神

しらのかみ○よろこばしてのりたまはく○わがみこさはにませども○かくばかりくしびなるみこはまさす○このく
喜曰 吾息雖多 未有若此靈異之兒不宜

にひさしくとせめまつるべきにあらす○かれはやくあめにたくりて○あめのことをさづけまつるべしとのりたま
久留此國 固當早送于天而授以天上之事

ひき○このときあめつちのひはなることとほからす○かれわまのみはしちをもちて○あめにあげまつりたまひき
是時天地相去未遠 故以天柱 舉於天也

○つぎにつぎのかみをうみたまひき○つくとよみのみこととまをす○またつくゆみのみこととまをす○そのみひか
次生月神 號月讀尊 亦曰月弓尊 其光彩

りうるはしきことひのかみにつぎて○ひのかみにならびてしらすべくましき○かれまたあめにたくりたまひき○
亞日神 可以配日神而治 故亦送之于天

つぎにひるこをうみたまひき○みとせへぬれをもあしなはれたざりき○かれわまのいはくすふねにのせて○かせ
次生蛭兒 雖已三歲脚猶不立 故載之於天磐椽樟船

のまにまにはなちすてたまひき○つぎにすのそのみこととまをす○またかむすのそのみこととまをす
而順風放棄 次生素菱鳴尊 亦曰神素菱鳴尊

○またはやすのそのみこととまをす○このかみいさみたけくいふりまして○またつねになさしさをわびとし
亦曰速素菱鳴尊 此神有勇悍以安忍且常以哭泣為行

たまふ○かれぬちのひとくをさはにそこなひ○またわをやまをからやまになしき○かれそのちちははふたば
故令國內人民多以天折復使青山變枯 故其父母二神

しらのねほかみ○すのそのみことにのりたまはく○まししとあぢぢなし○あめのしたにきみとますべから
敕素菱鳴尊 汝甚無道 不可以君臨天下

す○とほくねのくににまかるべしとのりたまひて○つひにやらひたまひき○
固當遠適於根國矣 遂逐之

あるふみにいはく○いさなきのみこと○あれあめつちをしらすむらづのみこととまをす○すな
一書曰 伊奘諾尊曰吾欲生御宇宙之珍子 乃

はちひだりのみてにますみのかがみととりたまへば○なりませるかみましき○これをねほひるめのみことと
以左手持白銅鏡則 有化生之神是謂大日靈尊

まをす○みぎりのみてにますみのかがみととりたまへば○なりませるかみましき○これをつくゆみのみこと
右手持白銅鏡則 有化生之神是謂月弓尊

とまをす○またみかしらしをめぐらしてみるまさかりに○なりませるかみましき○これをすのそのみことと
又迴首顧眄之間則 有化生之神 是謂素菱鳴尊

まをす○かれねほひるめのみこと○またつくゆみのみこととまをす○ともにあれましながらりうるはしくまし
即大日靈尊 及月弓尊 並是質性明麗故

かば○あめつちをしらしまさしめたまひき○すのそのみこととまをす○かれましながらみこころいちはやびまし
使照臨天地矣 素菱鳴尊是性好殘害故

しかば○ねのくにをしらしめたまひき○

令下治根國

あるふみにいはく○いさなきのみこと○すでにひのかみつきのかみをうみたまひて○つ
一書曰 伊奘諾尊 伊奘冉尊既生日神月神 次

生蛭兒 此兒年滿三歲 脚尙不立 次生鳥磐椽

樟船 輒以此船載蛭兒 順流放棄之 次生

素戔鳴尊 此神性惡 常好哭恚 國

民多死 青山爲枯 故其父母神敕 曰假使汝

治此國 必多所殘傷 故汝可以馭極遠根國

のりたまひき○

つぎにひのかみかぐつちのみことをうみたまふ○ときにいさなみのみこと○かぐつちのみことに○やかえてかむ
次生火神軻遇突智命 時伊奘冉尊 爲軻遇突智命所焦

而終矣其且終之間 臥生土神埴山姫神 及水神

罔象女神 卽軻遇突智命娶埴山姫神 生稚

産靈命 此神頭上 生蠶與桑 臍中生五穀

于時伊奘諾尊恨之 曰唯以一兒 替愛也我妹乎

則匍匐頭邊 匍匐脚邊而 哭泣流涕

焉其淚墮而爲神 號啼澤女命 是卽香山畝丘樹下

所居之神矣遂拔所帶十握劍 斬軻遇突智命 爲三段

此各化成神也 其劍刃垂血激上 爲天安

河邊所在五百箇磐石也復劍鋒垂血 激越其磐石爲神號

るかみのみなを○いはさくのかみとまをす○つぎにねさくのかみ○つぎにいはつつのをのみこと○あるひは○

日磐裂神 次根裂神 次磐筒男命 一云磐

はつつのをのみこと○またいはつつのめのみことともいふ○こはふつぬしのかみのみれやにます○またつるぎの

筒男命 及磐筒女命 即是經津主神之祖矣復劔鐔

つみはよりしたるちも○そのいはむらにたばしりつきてなりませるかみのみなを○みかはやびのかみとまをす

垂血 激越其磐石爲神號 日甕速日神

○つぎにひはやびのかみ○これたけみかづちのかみのみれやにます○あるひはみかはやびのみこと○つぎにひは

次燠速日神 即是武甕槌神之祖也 一云甕速日命 次燠速

やびのみこと○つぎにたけみかづちのかみともいふ○またつるぎのたかみよりしたるちも○そのいはむらにた

日命 次武甕槌神 復劔頭垂血 激越其磐

ばしりつきてなりませるかみのみなを○くらたかみのかみとまをす○つぎにくらやまつみのかみ○つぎにくらみ

石爲神號 日闇靈神 次闇山祇神 次闇罔

象神

あるふみにいはく○いさなみのみこと○はむすびのみことをうみたまふとまに○みこにやかえてかむさりま

一書曰 伊奘冉尊 生火産靈命時 爲子所焦而神

しき○そのかむさりまむすむとまに○みづのかみみつはのめのかみ○またつちのかみはにやまびめのかみ

退矣其且神退之時則生水神罔象女神及土神埴山姫神

をうみたまひ○またわまのよつらをうみたまひき○

又生天吉葛

あるふみにいはく○いさなみのみこと○ひのかみかづちのみことをうみまむすむとまに○あつかひな

一書曰 伊奘冉尊 且生火神刺遇突智命之時 悶熱懊

やましてたぐりしたまへば○これかみとなりましき○みなをかなやまびこのかみとまをす○つぎにみゆまり

惱因爲吐 此化爲神 名曰金山彦神 次小便

たまへば○これもかみとなりましき○みなをみつはのめのかみとまをす○つぎにみくそまりたまへば○これ

化爲神 名曰罔象女神 次大便 化

もかみとなりましき○みなをばにやまびめのかみとまをす○

爲神 名曰埴山媛神

あるふみにいはく○いさなみのみこと○ひのかみをうみたまふとまに○やかえてかむさりましぬ○かれさの

一書曰 伊奘冉尊 生火神時 被灼而神退矣故葬

くにのくまぬのありまのむらにわくしまつりき○くにびとこのかみのみたまをまつるには○はなあるとまに

於紀國熊野之有馬村焉 土俗祭此神之魂者 有華時則

ははなもてまつり○このみあるとまにはこのみもてまつる○またつづみふえはたともちひて○うたひまひて

以華祭 有果時則以果祭之 又用鼓吹幡旗 歌舞而

祭矣

あるふみにいはく○いさなきのみこと○いさなみのみこと○ねはやしやくにをうみたまひき○さての
一書曰 伊奘諾尊 與伊奘冉尊共生大八洲國 然後

らいさなきのみことのりたまはく○わがうりしくに○たださぎりのみかをりみてるかきどのりたまひて○
伊奘諾尊曰 我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉

すなはちふきはらししみいさになりませるかみを○しなつみこのみこととまをす○つきにしなとべのみこ
乃吹撥之氣化為神 號級長津彦命 次級長戸邊

と○こはかせのかみなり○またうあませるときに○うみたまひしみを○うかのみたまのみこととまをす○
命是風神也 又飢時 生兒 號倉稻魂命

またうみのかみをうみたまひき○わたつみのみこととまをす○やまのかみをうみたまひき○やまつみのみこ
又生海神 號海童命 山神 號山祇命

とまをす○みなどのかみをうみたまひき○はやあきつひのみこととまをす○さのかみをうみたまひき○く
水門神 號速秋津日命 木神 號

くのちのかみとまをす○つちのかみをうみたまひき○はにやすのかみとまをす○しかしてのちよろづのもの
句句廻馳神 土神 號埴安神 然後悉生萬物

とこごとくにうみたまひき○ひのかみかづちのみことのわれますときにいりて○そのみれやしなみの
焉 至於火神軻遇突智命之生也 其母伊奘冉

みこと○やかえてかむさりましき○
尊 見焦而化去

あるふみにいはく○いさなきのみこと○いさなみのみことをねはして○よもつくににりて○ねひしきまし
一書曰 伊奘諾尊 追伊奘冉尊 入於黃泉而及之共

てかたらひたまふとき○いさなみのみこととまをしたまはく○あがなせのみこと○なぞれそくいでもしつる
語時 伊奘冉尊曰 吾夫 何來之晚也

○あはすでによもつへくひしつ○しかれども○あがなせのみことのねひさせること○いさかしてければか
吾已餐泉之竈矣雖然 吾夫追來 甚可畏故將

へりなむ○しわれきも○あれねやすまじ○いでなみたまひそとまをしたまへども○いさなきのみこと○さき
還焉雖然 吾當寢息請勿視之 伊奘諾尊 不

たまはずて○しぬびにゆつつましをどらして○そはしらをひきかきて○たびどしてみたまへば○すなはち
聽 陰取湯津栲櫨 牽折雄柱以為秉炬而見之則膿

うみわさうじたかりき○かれいさなきのみこと○いたくれどろかしてのりたまはく○あはれもはえずいなし
沸虫流 時伊奘諾尊 大驚之曰 吾不意到於

こめしこめさきたなかくににきけりどのりたまひて○すなはちとくにげかへりましき○そのときいさなみ
不須也凶目汚穢之國矣 乃急走廻歸 于時伊奘

のみこと○うちみまをしたまはく○なぞちぎりしことをさきたまはずて○あれにはぢみせたまひつることを
冉尊恨曰 何不用要言 令吾耻辱

したまひて○すなはちよもつしこめやたりをつかはして○あるひはよもつひさめどもいふ○ねひをせめまつ
乃遣泉津醜女八人 一云泉津日狹女 追留之

りき○かれいさなきのみこと○つるぎをぬかしてしりへでにふきつにつけたまひき○かれくろみかづらをな
故伊奘諾尊 拔劍背揮以逃矣 因投黑鬘

げたまひしかば○それやがてえびかづらのみとなりき○しこめみてそをとりはみはみをはれば○またれひま
此卽化成蒲陶 醜女見而探瞰之瞰了則更追

つりき○いさなきのみこと○またゆつたましをなげたまひしかば○それやがてたかひなどなりき○しこめ
伊奘諾尊又投湯津杵櫛 此卽化成笱 醜女

またそをぬきはみはみをはれば○またれひまつりき○のちにはいさなみのみことも○みみづかられひいでま
亦以拔瞰之瞰了則更追 後則伊奘冉尊亦自來追

しき○いさもよのひと○よるひとつびをいみ○またよるなげくしをいひは○これそのことのもとなり○この
今世人 夜忌一片之火又夜忌擲櫛 此其縁也 是

ときいさなきのみこと○すでによもつひらさかにいたりましき○あるひはいさなきのみこと○すなはちたは
時伊奘諾尊已到泉津平坂 一云伊奘諾尊 乃向大

樹放尿 此卽化成巨川泉津日狹女將渡其水之間

とに○いさなきのみこと○すでによもつひらさかにいたりましきともいふ○かれすなはちちびさいはを○そ
伊奘諾尊 已至泉津平坂 故便以千人所引

のさかちにはへふたぎて○いさなみのみこと○あひむきたたして○つひにこをわたりたまふとき○い
磐石塞其坂路與伊奘冉尊相向而立遂建絶妻之誓時 伊

ぎなみのみことまををしたまはく○うるはしきあがなせのみこと○かくのたまはば○あれはひとひにみましが
奘冉尊曰 愛也吾夫 言如此者吾則當日縊殺

しらせるくにのひとくさちかしらをくびりころしてむとまをしたまへば○いさなきのみこと○すなはちた
汝所治國民千頭 伊奘諾尊 乃報曰

へたまはく○うるはしきあがなにものみこと○かくのたまはば○あれはやひとひにちいほびとらみてむと
愛也吾妹 言如此者吾則當日產生千五百頭

りたまひき○かれよもつひらさかにさやれりしいは○それをよみせにさやりますれはかみとまをす○またの
其於泉津平坂所塞磐石是謂泉門塞大神 亦名

みなはちかへしのねはかみ○いさなきのみこと○すでにかへりたまひて○すなはちちいてのりたまはく○あれ
道返大神矣 伊奘諾尊既還 乃追悔之曰 吾

まにいなしこめしこめさなななくにいたりき○かれあがみまのけがれをそきはらひてむとのりたま
前到於不須也凶目汚穢之國故當滌去吾身之濁穢

ひて○すなはちつくしのひむかのをどのたはばなのあはきはらいてまして○みそきはらひたまひき○ここ
則往至筑紫日向小戸橋之憶原而 祓除焉 于

にそのみねびをなげたまふ○これをながらほのかみとまをす○またそのみけしをなげたまふ○これをわづら
時投其帶 是謂長道磐神 又投其衣 是謂煩

ひのかみとまをす○またそのみはかまをなげたまふ○これをわきくひのかみとまをす○またそのみくつをな
神 又投其禪 是謂開囁神 又投其履

げたまふ○これをちしきのかみとまをす○つひにみまのけがれをそぎたまはむとして○すなはちことわけ
是謂道敷神 遂將盪滌身之所汚 乃興言

したまひて○かみつせはいせせばやし○しもつせはいせよわしどのりたまひて○はじめてなかつせにそ
曰上瀨是疾 下瀨是太弱 初濯於中瀨

ぎたまひき○これによりてなりませるかみのみなを○やまがつひのかみとまをす○つぎにねはまがつひの
因以生神號 曰八十杵津日神次大杵津日

かみ○つぎにそのまがをなほさむとして○なりませるかみのみなを○かひなほびのかみとまをす○つぎにね
神次將矯其枉而 生神號 曰神直日神 次大

液なほびのかみ○またわたのそにしづみそぎたまひき○これによりてなりませるかみのみなを○そつわ
直日神又沈濯於海底 因以生神號 曰底

たつみのみこととまをす○つぎにそつわのそつわのみこと○またしほのなかにかつきそぎたまひき○これに
津海童命 次底筒男命 又潛濯於潮中 因以

よりてなりませるかみのみなを○なかつわたつみのみこととまをす○つぎになかつつわのみこと○またし
生神號 曰中津海童命 次中筒男命 又浮

はのうへにうかびそぎたまひき○これによりてなりませるかみのみなを○うはつわたつみのみこととまを
濯於潮上 因以生神號 曰表津海童命

す○つぎにうはつつわのそつわのみこと○すべとばしちのかみましき○そのそつわのそつわのみこと○なかつつわ
次表筒男命 凡十神矣 其底筒男命 中筒男

をのみこと○うはつつわのそつわのみこと○これすみのえのねはかみなり○そつわつわつみのみこと○なかつつわ
命 表筒男命 是即住吉大神矣底津海童命 中津

たつみのみこと○うはつわたつみのみこと○これあづみのむらじらがいつさまつるかみなり○しかしての
海童命 表津海童命 是即阿曇連等所祭神矣 然後

ちに○ひだりのみめをあらひたまひしによりて○なりませるかみのみなを○あまてらすねはかみかみとまをす
洗左眼因以 生神號 曰天照大神

○またみぎりのみめをあらひたまひしによりて○なりませるかみのみなを○つくとみのみこととまをす○ま
復洗右眼因以 生神號 曰月讀尊 復

たみはなをあらひたまひしによりて○なりませるかみのみなを○すさのそつわのみこととまをす○すべとばし
洗鼻因以 生神號 曰素戔嗚命 凡三神

らのかみましましき○かくていざなぎのみこと○みはしらのみこにねはみここのりたまはく○あまてらすね
矣 已而伊弉諾尊勅任三子曰 天照大

はみかみは○たかまのはらをしらせ○つくとみのみこと○わをうなばらしはのやはへをしらせ○すさのそつわ
神者可以治高天原也月讀尊者可以治滄海原潮之八百重

みこと○あめのしたをしらせのりたまひき○このとまをすのそつわのみこと○みとしすでにたけまし○また
也素戔嗚尊可以治天下也是時素戔嗚尊年已長矣 復

やつかひげれひましさ○しかれどもあめのしたをしらせすて○つねになきいざらふつくとみたまひき○かれい
生八握鬚髯雖然不治天下 常以啼泣悲恨 故伊

さなきのみこと○いましなごもつねにわくねなくぞとひたまへば○あはみははのねのくにまからむとれ
伊奘諾尊 問曰汝何故恒啼如此耶 對曰吾欲從母於根國
もひてこそなくなれとこたへまをしたまへば○さなきのみことにくみたまひて○ころのまにまにゆくべ
只爲泣耳 伊奘諾尊惡之 日可以任情行
しどのりたまひて○すなはちやらひたまひさ○
矣 乃逐之

あるふみにいはく○さなきのみこと○つるぎをぬわして○かぐつちのみことをさりて○みきたになしたま
一書曰 伊奘諾尊 拔劍 斬軻遇突智命 爲三段

ひき○そのひときたは○たはひかづちのかみとなり○ひときたは○たはやまつみのかみとなり○ひときたは
其一段是爲大雷神 一段是爲大山祇神 一段是

○たかたかみのかみとなり○またいはく○かぐつちのみことをさりたまふとき○そのちたはしりて○わあ
爲高靈神 又曰 斬軻遇突智命時 其血激越 染

○そのかはらなるいはついはむらにしみつきて○なりませるかみのみなを○いはさくのかみとまをす○つ
於天八十河中所在五百箇磐石而因化成神號曰磐裂神次

ぎにねさくのかみのこ○いはつつのそのかみ○つぎにいはつつのめのかみのこ○ふつぬしのかみ○
根裂神兒 磐筒男神 次磐筒女神兒 經津主神

あるふみにいはく○さなきのみこと○かぐつちのみことをさりたまひて○つきたになしたまふ○これた
一書曰 伊奘諾尊 斬軻遇突智命 爲五段 此各

のそれのもいつばしらのやまつみのかみとなりましき○ひとつにはかしら○たはやまつみのかみとなり○ふ
化成五山祇神 一則首 化爲大山祇神二

たつにはむくろ○なやまつみのかみとなり○みつにはて○はやまつみのかみとなり○よつにはこし○ま
則身 化爲中山祇神三則手化爲麓山祇神四則腰 化

かやまつみのかみとなり○つつにはあし○しぎやまつみのかみとなり○このとささうたまへるらたばし
爲正勝山祇神五則足 化爲雝山祇神 是時斬血激灑

りて○はむらさくにしみつさ○これくささこのれのづからひをふふひこのもとなり○
染於石礫樹草 此草木沙石自含火之縁也

あるふみにいはく○さなきのみこと○そのいろもをみまくてもほして○すなはちみもがりのところにて
一書曰 伊奘諾尊 欲見其妹 乃到殯斂之處

りましき○このとさにしなみのみこと○なほうつしみみのごと○いでひかへてかたらひたまひさ○かくて
是時伊奘冉尊 猶如生平 出迎共語 已而

いさなきのみこと○わがなせのみこといであをなみたまひそとまをしたまひ○そのみことばをへて○たち
謂伊奘諾尊曰吾夫請勿視吾矣 言訖 忽

まぢみえたまはざりさ○そのとさくらかりしかば○さなきのみこと○すなはちひとつびともしてみそなは
然不見 于時闇也 伊奘諾尊 乃舉一片之火而視

す○とさにしなみのみこと○はれたたへてそのうへに○やくさのしかづちをりければ○いさなきのみこと
之時伊奘冉尊 脹滿大高上 有八色雷公 伊奘諾尊

驚而走還 是時雷等 皆起追來 時道邊有大桃

樹 故伊奘諾尊 隱其樹下因 採其實 以擲

雷者 雷等皆退走矣 此用桃避鬼之縁也

于時伊奘諾尊乃投其杖 曰自此以還雷不

敢來 是謂岐神 所謂八雷者 在首曰大雷

在胸曰火雷 在腹曰土雷 在背

曰稚雷 在尻曰黑雷 在手曰山雷

在足曰野雷 在陰曰裂雷

一書曰 伊奘諾尊 追至伊奘冉尊所在處 便語之

曰悲汝故來 答曰族也勿看

吾矣 伊奘諾尊不從 猶看之故 伊奘冉尊耻之

曰汝已見我情 我復見汝情 伊奘諾

尊亦慙焉 因將出返于時 不直默歸而 盟之

曰離族矣又不負於族 乃所睡之時 化生神號

曰速玉男神 次所掃之時 化生神號 曰泉

津事解男神 凡二神矣 伊奘諾尊曰 始為族

悲及思哀者 是吾之怯矣時 泉津守道者

白云有言矣 曰吾與汝已生國矣奈何更求生乎 吾

このくににどぞまはりてむ○えどもにかへらじとまをしたまふとまをしき○このときよもつくくりひめのかみ
則當雷此國 不可共去 是時泉津菊理媛神

もまをすことあると○いざなぎのみことさとしめして○ほめたまひつすなはちわらけましき○ただまのあ
亦有白事 伊奘諾尊聞而 善之乃散去矣 但親見

たりよもつくにをみまししこと○これはすでにさがなし○かれそのけがれをそそぎはらはむとれもほして○す
泉津國 此既不祥 故欲濯除其穢惡 乃

なはちあはれとまたはやすひなごにいでましみをなはしき○しかるにこのふたごは○しほいたくはやかりけ
往見粟門及速吸名門 然此二門 潮既太急故

れば○たちはなのをどにかへりいであして○そそぎはらひたまひき○ここにみづにいりて○いはつちのみこ
還向於橘小門而 祓濯也 于時入水 吹生磐土

命 命 吹生大直日神 又入 吹生底土

命 命 吹生大綾津日神 又入 吹生赤土命

命 命 吹生天地海原之諸神矣

一書曰 伊奘諾尊 勅任三子曰 天照大神

是時泉津菊理媛神

但親見

乃

潮既太急故

吹生磐土

吹生底土

吹生赤土命

出吹生天地海原之諸神矣

一書曰 伊奘諾尊 勅任三子曰

天照大神

かみは○たかまのはらをしらすべし○つくよみのみことは○ひのかみにならびて○あめのことをしらすべし
者可以御高天原也月夜見尊者可以配日神而知天事也

○すさのをのみことは○あをうなばらをしらすべし○のりたまひき○かくてあまてらすねほみかみ○あめに
素戔嗚尊者可以御滄海原也 既而天照大神 在於

天上 勅月夜見尊曰 聞葦原中國有保食神 宜

爾就候之 月夜見尊 受勅而 降到保食神許

保食神 乃廻首嚮國則 自口出飯

又嚮海則 鱗廣鱗狹亦自口出 又嚮山則 毛麁毛

柔亦自口出 夫品物悉 備貯之百机而饗之

是時月夜見尊忿然作色曰 穢哉鄙哉

寧可以口吐之物養我乎 廼拔劔 擊殺保

かみをうちころしたまひき○さてのちかへりことをして○つばらにそのことをまをすとき○あまてらす
食神 然後復命 具言其事時 天照大

神 甚怒之 日汝是惡神 不須相見 乃
たはみかみ○いたくいかりまして○みましはもあらぶるかみなり○わひままくほりせずとのりたまひて○す

與月夜見尊 一日一夜隔離而住 是後天照大神
なはちつくよみのみこと○ひとひとよへたてさわりてすたまひき○こののちあまてらすたはみかみ○

復遣天熊大人 往看之 保食神 實已死矣
またあめくまのうしをつかはして○ゆきてみしめたまふに○うけもちのかみ○まことにすまみまかれり○

唯有其神之頂化為牛馬顛上生粟眉上生蟹眼中生稗腹中
ただしそのかみのいなだきにうしうまなり○ひたひにあはなり○まゆにかひこなり○めにひえなり○はらに

生稻陰中生麥及大豆小豆天熊大人悉取持而奉進之 于
いねなり○ほとにむぎまたまめあづさなりしかば○あめくまのうしことごとくにとりもちてたてまつりき○そ

時天照大神喜之曰 是物者則顯見蒼生可食而
のときあまてらすたはみかみよろこばしてのりたまはく○このものせもは○うつしさをひとくさのくひて

活之物也 乃以粟稗麥豆為陸田種子以稻為水田種
いくべきものぞどのりたまひて○すなはちあはひえむぎまめを○はたつものとし○いねをたなつものとした

子因定天邑君 卽以其稻種 始殖于天狹田及長田
まふ○かれあめのひらきみをとだめ○すなはちそのいなだねを○はじめてあめのさたまたながたにうゑたま

ひしわば○そのあきたりはやつかにしなひしげりていとよくみのりき○またくちにまゆをふふみて○すなは
其秋垂穎八握莫莫然甚快也 又口裏含蜜 便得
ちいとをひくことをえたまひき○これよりかひのわざはじまりき○

抽絲 自此始有養蠶之道焉
ここにすさのをのみことまをしたまはく○あれいまみことまにまにねのくににまかりなむ○かれしましたかま

於是素戔嗚尊請曰 吾今奉勅將就根國 故欲暫向
のほらにまわでて○なねのみことにわひみてのちひたふるにまかりなむとれもふとまをしたまへば○ゆるしたま

高天原 與姉相見而後永退矣 勅許之
ひつ○すなはちあめにまわのほりましき○こののちいざなぎのみこと○みいさをすでにをへ○みいさをひみちわ

乃昇詣於天也 是後伊奘諾尊 功既至矣 德亦大矣
たらせり○ここにあめにのぼりてかへりことをして○やがてひのわかみやにとせまりましき○またいざなぎの

於是登天報命 仍畱宅於日少宮矣 又曰伊弉
みこと○かむことすでにをへて○あめにのぼりたまはむとす○こをもてしつみやをあはらのしににつくりて○し

諾尊神功既畢 靈運當遷 是以構幽宮於淡路洲 寂
づかにとこしへにわくりましきともいふ○はじめすさののみこと○あめにのぼりたまふとき○れはうみと

然長隱矣 始素戔嗚尊 昇天之時 溟渤以
ゆるぎゆり○やまをかなりはえき○こはかむさのたけくましてしからしめしなり○あまてらすたはみかみ○も

之鼓盪山岳為之鳴响此則神性雄健使之然也天照大神 素
のこをうみと

よりそのかみのいちはやびたまふことをしらしめせば○まゐのぼるさまをさこしめして○すなはちいたくたを
知其神暴惡 至聞來詣之狀 乃勃然而驚

ろわしてのりたまはく○わがなせのみことのみまさせるは○わによさみころならや○わがくにをうばはむと
日 吾弟之來 豈以善意乎 謂當有奪國之

志歟 夫父母既任諸子 各有其境

如何棄置當就之國敢窺窻此國乎 乃結髮為髻

縛裳為袴 便以八坂瓊五百箇御統之玉纏其

髻及腕又背負千箭之鞞與五百箭之鞞臂著稜威之高鞞

振起弓彌急握劍柄 踏堅庭而陷沒 若沫雪以蹴散

奮稜威之雄詰發稜威之噴讓而徑詰問焉 素菱鳴尊對曰

吾元無黑心 但父母已有嚴勅 將

永就根國 如不與姉相見 吾何能敢去 是以

跋涉雲霧 遠自來參 不意阿姉翻起嚴顏

于時天照大神復問曰 若然將何以明爾之

赤心也 對曰 請與姉共誓 夫誓約

之中 必當生子 如吾所生是女則 可以為有濁心

若是男則 可以為有清心 於是天照大神

乃索取素菱鳴尊十握劍 打折為三段濯於天真名井結

然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰田心姬命 次湍津

姬命 次市杵島姬命 凡三女神矣 既而素菱鳴尊

○あまてらすはみかみのみみづらまたたふにまかせる○やさかにのいはつのみすまるとたまをこひとらし
乞取天照大神鬚鬘及腕所纏 八坂瓊五百箇御統之玉

○あめのまなむにふりすすぎ○さがみにかみて○ふさうつるいふきのさきりに○なりませるかみのみなは○ま
濯於天真名井結然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號 曰

正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊 次天穗日命 是出雲臣土

にしのむらじらがたやなり○つぎにわまつひこねのみこと○こはねはしかふちのわたへ○やましろのあたへらが
師連等祖也 次天津彦根命 是凡川内直 山代直等祖

也 次活津彦根命 次熊野櫛樟日命凡五男神矣

このときあまてらすはみかみのりたまはく○そのものさねをたづねれば○やさかにのいはつみすまるとたまは
是時天照大神勅曰 原其物根則 八坂瓊五百箇御統

も○わがものなり○かれそのいつばしらのひこみこは○こことごとにあがみこなりとのりたまひて○すなはちとら
之玉者是吾物也故彼五男神悉是吾兒 乃取而

してひたしたまひき○またのりたまはく○そのとつかつるぎはも○みましのものなり○われこのみばしらのひめ
子養焉 又勅曰 其十握劍者是爾物也 故此三女神

みこは○こことごとにみましがみこなりとのりたまひて○すなはちすさのをのみこにさづけたまひき○こはつく
悉是爾兒 便授之素戔嗚尊 此則

しのひなかたのきみらが○いつ きまつるかみなり
筑紫胸肩君等所祭神是也

あるふみにいはく○ひのかみもとより○すさのをのみこと○たけくいちはやさみこころあることをしらし
一書曰日神本 知素戔嗚尊有武健陵物之意

めせり○そののぼりいでますとき○なせのみことのみまさせるゆゑは○よきみこころならじ○かならずあがわ
及其上至 便謂弟所以來者非是善意 必當奪我

まのはらをうばはむとねもはすにこことのりたまひて○すなはちすらすらのみよをひしたまひて○ねはみみ
天原 乃設丈夫武備 躬帶

にどつかつるぎここのつかつるぎやつかつるぎとどりはかし○またみくびらにちのりのゆきをればし○みた
十握劍九握劍八握劍 又背負千箭鞞 臂

たむきにいつのたかともをとりつけ○みてにゆみやをどらして○みみづからむかへふせぎたまふ○このとき
著稜威高鞞 手握弓箭 親迎防禦 是時

すさのをのみことまをしたまはく○われもとよりきたなきこころなし○ただなねのみことにあひままつらむ
素戔嗚尊告曰 吾元無惡心 唯欲與姉相見故

とれもふがゆゑに○しましまわさつるにこことまをしたまひき○こにひのかみ○すさのをのみこと○あ
爲暫來耳 於是日神與素戔嗚尊相

ひびきたたして○うけひたまはく○もしみましがこころわかくさよくて○いちはやさみこころあらずは○み
對而立 誓曰 若汝心明淨 不有陵奪之意 汝

ましがなまじみこ○かならずひこみこならましどのりたまひをへて○まづみはかせるとつかつるをみをし
所生兒 必當男矣言訖 先食所帶十握劍

て○なしたまへるみこを○たきつしまひめのみこを○まをす○またこのつかつるをみをして○なしたま
生兒 號瀛津島姬命 又食九握劍 生兒

へるみこを○たきつひめのみこを○まをす○またやつかつるをみをして○なしたまへるみこを○たどりひ
號湍津姫尊 又食八握劍 生兒 號田

めのみこを○まをす○すべてみはしらのひめがみましき○かくてすこのをのみこを○そのみくびにうながせ
心姫命 凡三女神矣 已而素戔嗚尊以其頸所嬰

るいほつみすまるのたまを○あめのぬなわ○またのなはいさのまなわにふりすぎて○そをみをしてなした
五百箇御統之瓊灌于天渟名井 亦名去來真名井而食之乃

まへるみこを○まさかあかつかはやひあめのねしほねのみこを○まをす○つぎにあまつひねのみこを○
生兒 號正哉吾勝勝速日天忍骨尊 次天津彦根命

つぎにいづくひねのみこを○つぎにあめのほひのみこを○つぎにくまねれしふのみこを○すべていつば
次活津彦根命 次天穗日命 次熊野忍踏命 凡五男

しらのひこがみましき○かれすこのをのみこを○すでにかちのしるしをえたまひき○ここにひのかみ○
神矣 故素戔嗚尊 既得勝驗 於是日神

すこのをのみこを○まよりきたなきみこころなかりしことをしらしめしき○すなはちひのかみのなしたま
方知素戔嗚尊固無惡意 乃以日神所生三

ひしみばしらのひめがみを○つくしのしまにあまくたらしめて○をしへたまはく○いましめばしらは○みち
女神 令降於筑紫洲因 教之曰 汝三神 宜
のなかにくだりぬて○すめみまのみこをたすけまつりて○またすめみまのみこにいつかれよどのりたま
降居道中 奉助天孫而 爲天孫所祭
ひき○
也

あるふみにいはく○すさのをのみこを○あめのぼりまさむとしたりたまふとき○かみありはあかるたまのみ
一書曰 素戔嗚尊 將昇天時 有一神號羽明

こをまをす○このかみひかへまつりて○みづのやさかにのまがたまをたてまつりき○かれすこのをのみこ
玉命 此神奉迎而 進以瑞八坂瓊之曲玉 故素戔嗚尊

と○そのたまをもちて○あめにまゐてたまひき○このときあまてらすればみかみ○なせのみこをあしきみこ
持其瓊玉而到天上也 是時天照大神 疑弟有惡心

ころますとらたがひまして○さくさこれをこしてなじりとひたまふに○すさのをのみこをこたへまをしたまは
起兵詰問 素戔嗚尊對曰

く○あがまわさつるゆゑは○まことになねのみこにまみえまつらむとれもひ○またうづたからみづのやさ
吾所以來者實欲與姉相見 亦欲獻珍寶瑞

かにのまがたまをたてまつらむとれもひてこそ○あへてけしきころぬらすとまをしたまひき○ここにあま
八坂瓊之曲玉耳 不敢有別意也 時天照

大神復問曰 汝言虛實 將何以爲驗

對曰 請吾與姉共立誓約 誓約之間 生

女爲黑心 生男爲赤心

乃堀天真名井三處 相與對立 是時天照大神 謂

素戔嗚尊 曰以吾所帶之劍今當奉汝 以汝所持八

坂瓊之曲玉可授吾矣 如此約束共相換取已而天照大

神以八坂瓊之曲玉浮寄於天真名井 齧斷瓊端而吹出氣噴

之中 化生神 號市杵島姬命 是居于遠瀛者也 又

齧斷瓊中而吹出氣噴之中 化生神 號田心姬命

大神復問曰

汝言虛實

將何以爲驗

對曰

請吾與姉共立誓約

誓約之間 生

女爲黑心

生男爲赤心

乃堀天真名井三處

相與對立

是時天照大神

謂

素戔嗚尊

曰以吾所帶之劍今當奉汝

以汝所持八

坂瓊之曲玉可授吾矣

如此約束共相換取已而天照大

神以八坂瓊之曲玉浮寄於天真名井 齧斷瓊端而吹出氣噴

之中 化生神

號市杵島姬命

是居于遠瀛者也

又

齧斷瓊中而吹出氣噴之中

化生神

號田心姬命

是居于中瀛者也又齧斷瓊尾而吹出氣噴之中 化生神

號湍津姬命 是居于近瀛者也凡三女神矣 於

是素戔嗚尊以所持劍浮寄於天真名井齧斷劍末而 吹出

氣噴之中 化生神 號天穗日命 次正哉吾勝勝速日

天忍骨尊 次天津彥根命 次活津彥根命 次熊野櫛樟

日命凡五男神矣

一書曰 日神 與素戔嗚尊隔天安河而 相對 乃立

誓約曰 汝若不有奸賊之心 汝所生子 必男矣

如生男 予以爲子而令治天原也 於是日

神先食十握劍 化生兒 瀛津島姬命 亦名市杵

鳴姬命 又食九握劍 化生兒 湍津姬命 又食

八握劍 化生兒 田霧姬命 已而素戔嗚尊含其左

髻所纏五百箇御統之瓊而 著於左手掌中 便化生男

矣 則稱之 曰正哉吾勝 因名之曰正哉吾勝

勝速日天忍穗耳尊 復含右髻之瓊 著於右手掌

中 化生天穗日命 復含嬰頸之瓊 著於左臂

中 化生天津彥根命 又自右臂中 化生活津

彥根命 又自左足中 化生熯速日命 又自右足

中 化生熊野忍踏命 亦名熊野忍隅命 其素

戔嗚尊所生之兒 皆已男矣 故日神方 知素戔嗚

尊元有赤心 便取其六男神 以爲日

神之子 使治天原 卽以日神所生三女神

使降居于葦原中國宇佐島矣 今在北海道中 號曰

道主貴 此則筑紫水沼君等祭神是也

是後素戔嗚尊之所行也甚無狀 何則 天照大神 以

天狹田長田爲田時 素戔嗚尊春則重播種子且毀其畔秋則

放天斑駒 使伏田中 復見天照大神當新嘗時

ひて○すなはちしぬびににひみやにみくそまりき○またあまてらすはみかみ○かひみそをれらさむとして○
則陰放屣於新宮 又見天照大神 方織神衣 居

みはたせのにましますをうかがひて○すなはちあめのふちごまをはきて○どののいらかをうがらて○なげられた
齋服殿 則剝天斑駒 穿殿藁而投納之

まひき○このときにあまてらすはみかみれどろかして○ひもてはみみをいためたまひき○これによりてか
是時天照大神驚動 以梭傷身 由此發愠

りまして○すなはちあめのいはやにりたまひ○いはをたててさしこもりましましき○かれあめつちのうら
乃入于天石窟 閉磐戸而幽居焉 故六合之内

とこやみにして○よるひるのわきをもしらすりき○このときやとろつのかみ○あめのやすのかはらにつとひて
常闇而 不知晝夜之相代于時八十萬神 會於天安河邊

○そのみまをさむまをばかりき○かれれもひがねのかみ○ふかくとほくれもひはかりて○つひにとこよのな
計其可禱之方 故思兼神 深謀遠慮 遂聚常世

がなきをりをおつめて○たがひにながなきせしめ○またあめのたちからそのかみを○いはどのわきにたらしめて
長鳴鳥 使互長鳴 亦以天手力雄神 立磐戸之側而

○なかとみのむらじのほつれやあめのこやねのみこと○いみべのれびどのほつれやあめのふとたまのみこと
中臣連遠祖天兒屋命 忌部首遠祖天太玉命

○あめのかぐやまのほつまかきをねこじて○ほつえには○やさかにのほつみすまるのたまをとりかけ
掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝 懸八坂瓊五百箇御統之

○なかつえには○やたかがみをとりかけ○あるひはまふつのかがみともいふ○しづえには○あをにきてしらにぎ
玉中枝懸八咫鏡 一云眞經津鏡 下枝懸青和幣白和

てをとりしでて○あひどもにのみまをしき○またさるめのみまのほつれやあめのうすめのみこと○すなはちて
幣 相與致其所禱焉又猿女君遠祖天鈿女命 則手持

にちまきのほこをもち○あめのいはやどのまへにたちて○たくみにわざをさし○またあめのかぐやまのまかき
茅纏之稍 立於天石窟戸之前巧作俳優 亦以天香山之眞

をかづらとし○ひかげをたすきとして○ほところたき○うけふせふみとせろかして○かひがかりせり○このとき
坂樹爲蔓以蘿爲手纏而火處燒覆槽置 顯神明之憑談是時

にあまてらすはみかみ○さこしめしてのりたまはく○あれこのころいはやにこもりをれば○あまのはらも○と
天照大神 聞之而曰 吾比閉居石窟 謂當天原

よあしはらのなかつくにも○かならずとこよゆくらむむれもふを○なだあめのうすめのみこと○かくあらさむ
亦豐葦原中國必爲長夜 云何天鈿女命嗜樂如此

ふぞどのりたまひて○すなはちみてづからいはいをほそめにあけてみそなはすとき○あめのたちからそのかみ
者乎 乃以手細開磐戸窺之時 天手力雄神

○あまてらすはみかみのみてたまはりて○ひさいだしまつりき○こになかとみのかみ○いみべのかみ○す
則奉承天照大神之手 引而奉出 於是中臣神 忌部神則

なはらしりくめなはをひきわたして○やがてなかへりりましとまをしき○さてのちもろのかみたち○つ
界以端出之繩 乃請曰勿復還幸 然後諸神 歸

みをすさのそのみことよせて○ちくらのねきさをねはせて○せめはたりき○かみをぬきてそのつみをあがなは
罪過於素戔鳴尊而科之千座置戸以促徵矣至使拔髮以贖其
せ○またそのあしのつめをさへにぬきてあがなはしめき○かくてつひにかむやらひくたしたまひき○
罪又拔其手足爪以贖之 已而竟遂降焉

あるふみにいはく○こののちわかひるめのみこと○すまはたさのにましまして○かむみをとわりたまふ○す
一書曰 是後稚日女尊 坐于齋服殿而 織神之御服也

さのそのみこと○そをみとまはして○すなはちふちごまをさかばきにはきて○そをそのぬちになげられたま
素戔鳴尊見之 則逆剝斑駒 投之殿内

へば○わかひるめのみこと○すなはちねをさしてはたよりたちて○もたるひにみみをやふりて○かむさりま
稚日女尊 乃驚而墮機 以所持梭傷體而神退

しぬ○かれあまてらすねはみかみ○すさのそのみこと○のりたまはく○みましなはさたなきころあり○み
矣故天照大神 謂素戔鳴尊 曰汝猶有黑心 不

ましどあひまほりせずどのりたまひて○すなはちあめのいはやにうりまして○そのいはやとをどがたま
欲與汝相見 乃入于天石窟而 閉其磐戸焉

ひき○ここにあめのしたとこやみにして○よるひるのわづさもなし○ここにたかみむすびのみこと○のみこ
於是天下恒闇 無復晝夜之殊時有高皇產靈尊之息

たもひがねのかみといふかみまして○たもひはかりのさとりありき○かれやよるつのかみたち○あめのた
思兼神者 有思慮之智 故八十萬神 會於

けちにつとひて○とほしたまふとき○すなはちたもひてまをしけらく○かのかみのみかたをうつしつくりて
天高市而問之 乃思而白 曰宜圖造彼神之象

○とまをつらむとまをしき○かれすなはちいしりせめのみことを○たくみとし○あめのかぐやまのかねを
而奉招禱也 故即以石凝姥命 爲治工採天香山之金

どりて○ひばこをつくりき○またまなかのかねをうつはきにはきて○あめのはぶきをつくり○これぞもちひ
以 作日矛 又全剝眞名鹿之皮 以作天羽鞞 用此奉

てつくりまづれるみかたは○すなはちちのくににましますひのくまのかみなり○
造之神象是 即紀國所坐日前神也

あるふみにいはく○ひのかみ○あめのねきたをみたしたまふとき○すさのそのみこと○はるはみぞうめ
一書曰 日神 以天垣田爲田時 素戔鳴尊春則填渠

あはち○あきはたなつものすでになりぬれば○あせなはをひきわたしたまひき○またひのかみ○はたどの
毀畔秋則其穀已成 亘以絡繩 且日神 居織

にましますまに○すなはちふちごまをいさはきにはきて○そののぬちになげられたまひき○すてこの
殿時 則生剝斑駒 納其殿内 凡此諸

もろもろのわざ○ことごとにあぢきなし○しかれども○ひのかみみうつくしみのみこところもちて○どがめた
事 盡は無狀 雖然 日神以恩親之意 不愠

まはすうちみたまはず○みなゆるしたまひき○ここにひのかみ○にひなへさしめすとき○すさのそのみ
不恨 皆悉容焉 及至日神當新嘗之時 素戔鳴

尊則於其新宮御席之下 陰自迸糞 日神不知

倭坐席上 由是學體不平 故以恚恨

廼居于天石窟 閉其磐戶 于時諸神憂之

乃使鏡作部遠祖天糠戶神 造鏡 忌部遠

祖天太玉神 造幣 玉作部遠祖豐玉神 造

玉 又使山雷神 採五百箇眞坂樹八十玉籤野槌神

採五百箇野篤八十玉籤凡此諸物 皆來聚集時中臣

遠祖天兒屋命 則神祝祝之 於是日神方開磐戶

而出焉 是時以鏡入其石窟 觸戶少瑕 其

瑕於今猶存此卽伊勢崇祠之大神也 既而科罪於素戔嗚
尊而責其祓具 是以有手端吉棄物 足端凶棄物
亦以唾爲白和幣以洩爲青和幣 用此解除竟 遂
神逐逐之

一書曰 是後 日神之田有三處 號曰天安田天平田天

邑田 此皆良田 雖經霖旱 無所損傷 其素戔

嗚尊之田 亦有三處 號曰天穢田天川依田天口銳田

此皆磽地 兩則流之旱則焦之故素戔嗚尊 妬害良

田 春則廢渠槽埋溝毀畔又重播種子秋則插籤伏馬

べてこのあしきわざ○かつてやむべきなかりき○しかれどもひのかみは○いかりたまはず○つねにたひらけ
凡此惡事 曾無息時 雖然日神 不愠 恒以平恕
さみころもちてゆるしたまひき○しかしか○ひのかみ○あめのいはやにこもりすすにいたりて○もろもろ
相容焉 云云至於日神閉居于天石窟也 諸神
のかみたち○なかとみのひらじのとはつたやこをむすびのみことのみこ○あめのこやねのみことをして○

遣中臣連遠祖興台產靈命兒 天兒屋命而

使祈焉 於是天兒屋命 掘天香山之眞坂木而 上枝

懸以鏡作遠祖天拔戸命兒 石凝戸邊命所作 八咫鏡

中枝 懸以玉作遠祖伊奘諾尊兒天明玉命所作

八坂瓊之曲玉 下枝 懸以粟國忌部遠祖天日鷲命

所作 木綿 乃使忌部首遠祖天太玉命 執取

而 廣厚稱辭祈啓矣 于時日神聞之 日頃者

人雖多請未有若此言之麗美者也 乃細開磐戸而窺

之 是時天手力雄神 侍磐戸側 則引開之

日神之光 滿於六合 故諸神 大喜 卽科

素戔嗚尊 千座置戸之解除 以手爪爲吉棄物 以足爪

爲凶棄物 乃使天兒屋命 掌其解除之太諄辭而宣

之焉世人慎收己爪者 此其緣也 既而諸神

嘖素戔嗚尊曰 汝所行甚無賴 故不可住於天上亦

不可居於葦原中國 宜急適於底根國 乃其逐降之

于時霖也 素戔嗚尊結束青草以 爲笠蓑而

乞宿於衆神

衆神曰

汝是躬行濁

惡而見逐謫者

如何乞宿於我

遂同拒之是以

風雨雖甚

不得留休而

辛苦降矣

自爾以來

世諱著笠蓑以入他人屋內

又諱負束草以入人家內

有犯此者

必債解除

此太古之遺法也 是後

素戔鳴尊曰

諸神逐我

我今當永去

如何不與我姊相見而

檀自徑去歟

廼

復扇天扇國

上詣于天時

天鈿女命見之而

告於日神也日神曰

吾弟所以上來

非復好

意

必欲奪我天國歟

吾雖婦女

何當避

乎

乃躬裝武備

云云

於是素戔鳴尊誓

曰

吾若懷不善而

復上來者

吾今齧玉生兒

必當爲女矣

如此則可以降女神於葦原中國 如有清

心者

必當生男矣

如此則可以使男神御天上且

姊之所生亦

同此誓

於是日神先

齧十握劍

云云

素戔鳴尊乃輻轆然

解其左髻所

纏五百箇御統之瓊綸而

瓊響瓊瑤

濯浮於天渟名并齧齒

其瓊端

置之左掌而生兒

正哉吾勝勝速日

れしはねのみこと○またみぎりのたまのはしをかみて○みぎりのみたなうらにねかしてなしたまへるみこと
天忍穗根尊復齧右瓊端 置之右掌而生兒
あめのはひのみこと○こはいつものねみ○むさしのくにのみやつこ○はにしのむらじらごとほつれやなり○
天穗日命 此出雲臣武藏國造 土師連等遠祖也
つぎにあまつひねのみこと○こはいつばらさのくにのみやつこ○ねかたへのむらじらごとほつれやなり○つ
次天津彦根命 此茨城國造 額田部連等遠祖也 次
ぎにいくつひねのみこと○つぎにひはやびのみこと○つぎにくまねれしすみのみこと○すべてむばしらの
活津彦根命 次煖速日命 次熊野大隅命 凡六男神
ひこみこまじき○こにすさのをのみこと○ひのかみにまをしたまはく○あれさらにもあひのほりこしゆはは
矣 於是素戔嗚尊白日神 曰吾所以更昇來
○もろもろのかみたち○あれをねのくににやらへば○いままかりなむとするを○もしなねのみことにあひま
衆神 處我以根國 今當就去 若不與姉相見
みえまつらすは○つひにしねびわかれまつりかねまし○かれまことにさよさところをもちて○またのぼりさ
終不能忍離 故實以清心 復上來
つるにこそ○いまはまみえまつることをすでにをへぬれば○もろもろのかみたちのころのまにまに○これよ
耳 今則奉觀已訖 當隨衆神之意 自此
りながくねのくににまかりなむ○いでなねのみこと○あまつみくにをしるしめして○まさげくまませ○ま
永歸根國矣 請姉 照臨天國 自可平安且

たわがきよきこころをもちて○なせるみこたちも○なねのみことにてまつらむとまをしたまひさ○かくて
吾以清心 所生兒等亦奉於姉 己而
またかへりくだりましき○
復還降焉

このときすさのをのみこと○あめよりして○いつものくにのひのかはかみにくだりつきたまふとき○ねなくこ
是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸川上時 有啼
あわり○かれこのまにまにまじいでまししかば○ねさなどたみなとありて○なかにをををすゑて○かきなで
哭之聲故尋聲覓往 有一老翁與老婆中間置一少女撫
つつなくなり○すさのをのみこと○いましたはたれど○なぞかくねなくとひたまへば○こたへまをさくわは
而哭之素戔嗚尊 問曰汝等誰也何爲如此哭之耶對曰吾是
くにつかみなはあしなづち○あがめのははてなづち○このををめはあがこなり○なはくしなだひめ○なくゆゑは○
國神號脚摩乳我妻號手摩乳此少女是吾兒也號奇稻田姬所
さきにあがこやををめありしを○うひごにやまたをろちにのまえて○いまこのををめも○またのまえなむを○
以哭者往時吾兒有八箇少女每生爲八岐大蛇所吞今此少女
のがるすべなきゆゑに○ねなきかなしむとまをしき○すさのをのみこと○のりたまはく○もししからばいましむ
且臨被吞無由脫免故以哀傷素戔嗚尊勅 曰若然汝當
すめをあれにたてまつりてむやどのりたまへば○みことまにたてまつらむとみこたへまをしき○かれすさ
以女奉吾耶 對曰隨勅奉矣 故素

のそのみことたちまことに〇くしなたひめのみことを〇ゆつつかぐしにどりなして〇みづらにさしたまひき〇
葦鳴尊立 化奇稻田姬命爲湯津抓櫛而挿於髻矣

すなはちあしなづちのかみ〇てなづちのかみに〇やしほをりのさけをわましめ〇またさすやまをゆはせて〇れ
乃使脚摩乳神手摩乳神 釀八醞酒 并作假廢八間各

のまたのまさかぬひとづつたきて〇さけをりてまらたまひき〇そのときになりてまことをろちさつ〇かしら
置一槽而 盛酒以待之 至期果有大蛇來 頭尾

をたのもたのまやまたあり〇めはあかかぢなし〇まつかへせにれひて〇やをやたにのわひたにはひわたれり〇
各有八岐 眼如赤酸漿松栢生於背上而蔓延於八丘八谷

さけをえつるるときに〇かしらを見なふねをどにさしたれつ〇のみをひてねむりき〇ここにすさのそのみこと〇
之間及至得酒頭各入一槽 飲醉而睡 時素葦鳴尊

すなはちみはかせるとつかつるぎをぬわして〇そのをろちをさださにきりたまふに〇をにいたりてつるぎのは
乃拔所帶十握劍 寸斬其蛇 至尾劍亦少缺

すこしかげき〇かれそのををさしききてみそなはししがば〇なかにつるぎありけり〇これいはゆるあまのむらぐ
故割裂其尾視之 中有一劍 此所謂天襲雲

ものつるぎなり〇すさのそのみことのりたまはく〇こはあやしきつるぎなり〇あれいかでわたくしにれかひど
劍也 素葦鳴尊曰 是神劍也 吾何敢私以安乎

のりたまひて〇すなはちあまつかみにたてまつりたまひき〇さてのちみあひまさむところをまきいでまして〇つ
乃上獻於天神也 然後行覓將婚處 遂

ひにいづものくにのすがのどころにいりまして〇すなはちことあげして〇わがみこころすがしどのりたま
到出雲國清之地 乃興言 曰吾心清清

ひて〇そこにみやづくりましき〇そのときすさのそのみこと〇みうたよみしたまはく〇やぐもたつ〇い
於彼處建宮 時素葦鳴尊 歌曰 夜句茂多菟伊

づもやへがき〇つまごみに〇やへがきつくる〇そのやへがきと
都毛夜霸餓岐菟磨語味爾夜霸餓枳菟俱盧贈廼夜霸餓岐廻

すなはちみどのまはひしたまひて〇みこれなむぢのかみをうたまひき〇かくてのりたまはく〇わがみこのみ
乃相與邁合而 生兒大己貴神 因勅 曰吾兒

やのねびとは〇やがてあしなづちのかみ〇てなづちのかみなりとのりたまひき〇われなをふたばしらのかみにた
宮首卽脚摩乳神手摩乳神也 故賜號於二神

まひて〇いなだのみやぬしのかみといふ〇かくてすさのそのみこと〇つひにねのくににいでまし〇
曰稻田宮主神既而素葦鳴尊遂就於根國矣

あるふみにいはく〇すさのそのみこと〇あめよりして〇いづものひのかはかみにくだりつさまして〇すなは
一書曰 素葦鳴尊 自天而降到於出雲簸川上 則見

ちいなだのみやぬしすさのやつみのかみのむすめ〇なはいなだひめのみことをみそなはして〇やがてくし
稻田宮主簀狹八箇耳神女子號稻田姬命 乃於奇

どにれこしてうみたまへるみことを〇すがのゆやまぬしみなさるひこやしまじぬのみことをまをす〇あるひ
戸爲起而生兒 號清湯山主三名狹漏彦八島篠命 一云

はいふ○すがのかけなさるひこやしまでのみこと○またいふ○すがのゆやまぬしみなさるひこやしまぬの
清繫名坂輕彦八嶋手命 又云 清湯山主三名狹漏彦八

みこと○このかみのいつよのひこ○やがてははくはぬしのかみにます○
嶋野命 此神五世孫即大國主神也

あるふみにいはく○このときさすのをのみこと○やすぎのくにのえのかはかみにくだりつゝさまじき○そこに
一書曰 是時素戔鳴尊 下至於安藝國可愛川上也彼處

かみあり○なをわしなつてなづのかみといふ○そのめのなをい なたのみやぬしすのやつみみのかみといふ
有神名曰脚摩手摩神 其妻名曰稻田宮主簀狹八箇耳神

○このかみまさにはらめり○めをともはうれひて○すなはちすさのののみことにまをしまつらく○あがらめ
此神正在妊身夫妻共憂 乃告素戔鳴尊 曰我

るこさはなりしが○うむとにやまたをろちきて○のみてひとりものこりあへず○いまわれこうみなむとす
生兒雖多每生輒有八岐大蛇來吞不得一存今吾且産

るを○こもまたのまえなむとをれそる○こをもてかなしむとまをさしき○すさのののみこと○すなはちを
恐亦見吞 是以哀傷 素戔鳴尊乃教之

しへたまはく○いましもろもろのこのみをもて○さげやはらをかもしてよ○われいししがためにをろちをど
曰 汝可以衆菓 釀酒八甕 吾當爲汝殺蛇

りてむとをしへたまへば○ふたばしらのかみ○みをしへのまにまにさげをまけつ○こうむとさになりて○ま
二神 隨教設酒 至産時 果

ことにかのをろちきて○とにむかひてこのまじしき○すさのののみこと○をろちになれはもかしこさか
彼大蛇來 當戸將吞兒焉 素戔鳴尊勅蛇曰汝是可畏

みなり○あへせざらめやとのりたまひて○すなはちやはらのさげを○くちむとにそそぎいれたまふに○その
之神敢不饗乎 乃以八甕酒 每口沃入 其

をろちさげをのみてねむりき○すさのののみこと○つるぎをぬかしてさうたまふ○をさるるときに○つるぎ
蛇飲酒而睡 素戔鳴尊拔劔斬之 至斬尾時劔刃

のはすこしかけぬれば○さきてみそなはししかば○つるぎをのなかにありき○これをくさなきのつるぎと
少缺 割而視之則 劔在尾中 是號草薙劔

もいふ○こはいまをほりのくにのあゆちのむらにます○すなはちあつたのはふりがもちいつくかみなり○そ
此今在尾張國吾湯市村即熱田祝部所掌之神是也其

のをろちをさうたまひしつるぎのなを○をろちのあらまさいふ○こはいまいそのかみのかみみやにます○
斬蛇劔號 曰蛇薙正 此今在石上神宮也

こののちにいただのみやぬしすのやつみみのかみがうめるこ○まがみふるくしなだひめのみこと○いつ
是後以稻田宮主簀狹八箇耳神生兒眞髮觸奇稻田姬命遷

ものくにのひのかはかみにうつしれきて○ひたしたまひき○しかしてのちすさのののみこと○みめとなした
置於出雲國簸川上而長養焉 然後素戔鳴尊 以爲妃

まひて○うみたまへるみこのむつよのひこ○これをねはむちのみこととまをす○
而 所生兒之六世孫 是曰大己貴命矣

あるふみにいはく○すさのそのみこと○くしなだひめのみことをめさむとれもはして○あしなづちてなづち
一書曰 素戔鳴尊 欲幸奇稻田姬命而 乞之脚摩乳
のかみにこひたまへば○こたへまをさく○いでまづかのをろちをとりたまへ○さてのちにめさばえけむとま
手摩乳神 對曰 請先殺彼蛇 然後幸者宜也

をしき○かのをろちはかしらごとこれのもれのもいははまつあり○ふたつのわきにやまありて○いどかしこ
彼大蛇每頭各有石松 兩脇有山 甚可畏

し○いかにしてかもとりたまはむとまをしき○すさのそのみこと○すなはちたばかりであしきさけをかみて
矣將何以殺之 素戔鳴尊 乃計釀毒酒以

○のましめたまふに○をろちあひてねむりき○すさのそのみこと○すなはちをろちのからさひのつるぎをも
飲之 蛇醉而睡 素戔鳴尊 乃以蛇韓鋤劔

ちて○かしらごさりはらごさりをとさうたまひき○そのをさうたまふとまに○つるぎのはすこしかげき○か
斬頭斬腹斬尾 其斬尾之時 劔刃少缺 故

裂尾而看之即 別有一劔焉 名爲草薙劔 此劔

○ひかしすさのそのみこと○みもとにありしを○すまははりのくににます○そのすさのそのみこと○を
昔在素戔鳴尊許 今在於尾張國也其素戔鳴尊斬蛇

ろちをさうたまひしつるぎは○すまさひのはふりがもとにあり○そのをろちをさうたまへりしころは○す
之劔 今在吉備祝部許也其斬大蛇之地則 出

づものくにのひのかはかみのやまこれなり○
簸川上山是也

あるふみにいはく○すさのそのみこと○みしわざあぢきなし○かれもろちのかみたち○ちくらたきとをれ
一書曰 素戔鳴尊 所行無狀 故諸神 科以千座

はせて○つひにやらひき○このときすさのそのみこと○そのみこいたけるのかみをわて○しらすのくにに
置戸而遂逐之是時素戔鳴尊帥其子五十猛神 降到於新

だりつ○そしむりのころにまして○すなはちことあげしたまはく○このころにはあれをらまくほりせ
羅國居曾戸茂梨之處乃興言曰 此地吾不欲居

すことあげしたまひて○つひにはにをもちてふねをつくり○それのらして○ひむかしにわたりて○いつ
遂以埴土作舟 乘之 東渡 出

ものくにのひのかはかみなるとりかみのたけにいたりましき○ここにそのころにひとをのむろちをとりき
雲國簸川上所在鳥上之峯 時彼處有吞人大蛇

○すさのそのみこと○すなはちあまのはへさりのつるぎをもちて○そのをろちをさうたまひき○ここにをろ
素戔鳴尊 乃以天蠅斫劔 斬彼大蛇 時斬蛇

ちのをさうたまふに○つるぎのはかけしかば○すなはちささてみそなはししに○そのなかにあやしきつひ
尾而 刃缺 卽擘而視之 尾中有一神劔

ぎありけり○すさのそのみこと○りたまはく○こはわたくしにもちゆべきものにわらすどのりたまひて○す
素戔鳴尊曰 此不可以吾私用也 乃

遣五世孫天菴根神 上奉於天神 此今所謂

草薙劔矣 初五十猛神 天降之時 多將樹種而下

然不殖韓地 盡以持歸 遂始自筑紫 凡大

八洲國之内 莫不播殖而 成青山焉 所以稱五十

猛神 為有功之神即紀國所坐大神是也

一書曰素戔嗚尊 在出雲國曰 韓鄉之島是有金

銀 若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也 乃拔

鬚髯散之 是成杉 又拔散胸毛 是成檜

尻毛是成枝 眉毛是成橡樟 已而定其當用之方 乃

稱之曰 杉及橡樟此兩樹 可以為浮寶 檜可以

為瑞宮之材被可以為顯見蒼生與津棄尸將臥之具

夫須噉八十木種皆能播生 于時素戔嗚尊之子號

曰五十猛命 妹大屋津姬命次柵津姬命 凡此三神

亦 能分布木種 即奉渡於紀國也 然

後素戔嗚尊 居熊成峯而 遂入於根國矣

一書曰 大國主神 亦名大物主神 亦號國作大己貴

命 亦曰葦原醜男神 亦曰八千弋神 亦曰大國玉

神 亦曰顯國玉神 其子凡有一百八十一神

○このねはなむぢのみこと○すくなびこのみこと○ちからをわはせこのをむつびて○あめのしたをつ
夫大己貴命 與少彦名命 戮力一心 經營天下

○またどりけたものはふむしのわざはひをばらはむためには○そのまじなひのりをさだめたまひき○こ
復爲顯見蒼生及畜産則 定其療病之方

○またどりけたものはふむしのわざはひをばらはむためには○そのまじなひのりをさだめたまひき○こ
又爲攘鳥獸昆虫之災異則 定其禁厭之法 是

をもてねはみたから○いまにいたるまでみなみたまのふゆをかがふれり○そのかみねはなむぢのみこと○す
以百姓 至今成蒙恩賴 嘗大己貴命 謂

くなびこのみことにかたらしひたまはく○われらがつくれるくに○いかによくなせりといはむとわたらひた
少彦名命 日吾等所造之國豈謂善成之乎

へば○すくなびこのみことかたへたまはく○あるはなせるところもあり○あるはなざるどころもあり
少彦名命對曰 或有所成 或有所成 或有所成

こたへたまひき○そのちすくなびこのみこと○くまぬのみさきにいたりまして○つひにこよのくにに
其後少彦名命 行至熊野崎 遂適於常世

いでまじき○またあはしまにいたりまして○あはがらにのぼりしかば○はじかえわたりて○こよのくにに
郷矣 亦曰至淡嶋而 緣粟莖則 彈渡而 至常世郷

いたりまじきともしふ○それよりのちくぬちのならざるころは○ねはなむぢのわみ○ひどりよくめぐりつ
自後國中所未成 大己貴神獨能巡造

つつくりたまひて○つひにすづものくにいたりて○ことあげしたまはく○このあしはらのなかつくには○
遂到出雲國乃 興言曰 夫葦原中國

もどよりあらびて○すはねくさまでことごとくひさやけり○しかれどもわれすでにうちさため
本自荒芒至磐石草木咸能強暴 然吾已摧伏

て○まつろはぬものなし○すまこのくにをさめむは○ただわれひとりこそあれ○ともあれどもにあめのし
莫不和順 今理此國 唯吾一身而已其與吾共理天

たをさめむかみは○けだしあらじかごとくあげしたまひき○そのとさあやしきひかりうみをとらして○た
下者 蓋有之乎 于時神光照海 忽

ちまらにうかびくるかみありてのりたまはく○もしわれあらずは○いましいかでよくこのくにをむけむ○あ
然有浮來者曰 如吾不在 汝何能平此國乎 由

れあるによりてこそ○いましこのねはなるいさををたててつれとのりたまひき○このときたはなむぢのみこ
吾在故 汝得建其大造之績矣 是時大己貴命

と○しからばみまはしたれどもとひたまへば○われはもいましがさみたましくしみたまなりとこたへたまひ
問曰然則汝是誰耶 對曰吾是汝之幸魂奇魂也

き○ねはなむぢのみことまをしたまはく○しからばすなはちみまはしはわがさみたましくしみたまなりとしりぬ
大己貴命曰 唯然廼知是吾之幸魂奇魂

○すまはいつくすままくねもはずとまをしたまへば○わはやまどのくにのみむろのやまにすまむとねも
今欲何處住耶 對曰吾欲住日本國三諸山

ふとこたへたまひき○かれすなはちそこにみづみやをつくりて○しづまりまさしめたまひき○これたはみわの

故即營宮彼處 使就而居 此大三輪

たはものぬしのかみなり○このかみはすなはちかものきみ○たはみわのきみら○またひめたたらいすずひめのみ

大物主神也此神即甘茂君 大三輪君等又姫踏鞴五十

みことのみねなり○またいはくことしるぬしのかみ○やひろくまわになりて○みしまのみぞぐひひめのみ

鈴姫命之祖也又曰事代主神化為八尋熊罴通三嶋溝織姫命

こと○あるひはふ○たまぐしひめのみことにかよひまして○うみたまへるみこ○ひめたたらいすずひめのみ

或云 玉櫛姫命而 生兒姫踏鞴五十鈴姫命

みこと○これかひやまといはれびこのすめらみことのたはさきさきとなりましき○はじめたはなむぢのみこと

是為神日本磐余彦天皇之后也 初大己貴命之平

のくにむけのとき○うづものくにのささのをばまにいたりまして○みをしせむじしたまふに○このときさう

國也 行到出雲國五十狹狹之小汀而且當飲食是時海

なばらにたちまちひとこゑあり○れどろきてまきたまへとも○ふつにものみみえず○しまらくありていどり

上忽有人聲 乃驚而求之 都無所見 頃時有一箇小

ひさかみ○かがみのかはをふねどなし○ささのはをころもどなして○やややにうしほのまにまにうか

男 以白藪皮為舟以鵲鷗羽為衣 漸隨潮水以浮到

びきつ○たはなむぢのみこと○すなはちどりてみたならにすゑて○もてあそびたまひしかば○をせりてそ

大己貴命 即取置掌中而 翫之則 跳鬻其

のみつらをかみき○すなはちそのさまをわやしみて○つかひをまたして○あまつかみにまをしたまひき○こ

類 乃怪其物色 遣使 自於天神 于

こにたかみむすびのみことさきしめしてのりたまはく○あかなせるみこ○れよそちいほはしらあり○そのな

時高皇產靈尊聞之而曰 吾所產兒凡有一千五百座其

かにひとりのみこいとさかなくて○をしへごにしたらがはず○たなまたよりくさねちにしは○かならずそれ

中一兒最惡 不順教養 自指間漏墮者 必彼矣

ならむ○めぐみてひたしてよどのりたまひき○これすなはちすくなびこののみことなり○

宜愛而養之 此即少彦名命是也

やまどふみかみよのかみのさまをばりぬ

日本紀神代上終

三部本紀卷之三終

